さくら

あそうリネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
さくら

【Ｎコード】
Ｎ５１０７Ｄ

【作者名】
あそうリネ

【あらすじ】
私の好きな人は君。でも私は知ってる。君が決して私を振り向かないことを。

演技力には自信があった。

このキモチを君にばらさない自信があった。

君が私に恋愛感情を抱かない自信があった。

無駄な自信ばかりが私の胸に溢れてた。

気が付いたら、私は既に君に出会っていた。

私と君の関係は『幼馴染み』、というやつだ。

当然のように私は君を好きになり、当然のように君は私を『一番の友達』と呼ぶようになった。

まだ愛だの恋だのをよく分かっていなかった私は、君と楽しく毎日を過ごせたらそれで良かった。

でも、私たちが小学生になるかならないかの頃に、君は引っ越しをすることになった。

当時の私にとって、君の引っ越し先は遠すぎた。

誰かを想って泣いたのは、この時が初めてだった。

◇◆◇◆◇◆◇

「一年ぶりだね」

「うん」

「大学合格おめでとう」

「ありがとう。そっちもおめでとう」

「ありがとう」

君は微笑んだ。

君が引っ越してしまったあとも、私たちは何度か会った。

親同士仲が良かったから、なにかしら会う機会が設けられたのだ。

そして、私と君は年を重ねる毎に親抜きで二人だけで会うようになっていった。

「結局大学も別々だね」

「本当だな。ま、大学違ってもいっぱい遊べるしさ」

「うん」

「じゃっ行こーぜ」

私たちは、恋人同士に見えるだろうか。
兄弟に見えるだろうか。
先輩後輩？仕事仲間？
やっぱり、友達同士。

君は何をしてても楽しそうに、嬉しそうに笑う。
私は君のその表情に何度も助けられ、何度も苦しめられた。

そしてこれからも、私は君に助けられ、君に苦しめられ続けるのだろう。

君は私にとって、天使で、悪魔だから。

◇◆◇◆◇◆◇

「楽しかったね」

「うん」

私と君の間で、珍しく沈黙が流れた。

いつもは別れ際、私は無口になってしまうけれど、君は脳天気に陽気にべらべらと喋るのに。

今日は君までも無口。

もしかしてもしかして。

淡い期待を抱いてしまう。

君ももしかして私と同じキモチなの？

淡い期待を抱いてしまう。

別れたくない？もっと一緒に居たい？ずっとずっと側に居たい？

濃い期待。

でもやっぱり、そんな期待は裏切られる。

昔から決まってるんだ。

「あのさ、俺の二個上の先輩に『鈴野さん』って人がいるんだけど

さ」

君は言いにくそうに、少しずつ言葉を口から出していった。

「……男の人？女の人？」

「男だよ」

そこで少し安心をした。

「鈴野さんってさ、すっげぇ会社の御曹司ってやつでさ。いや、マジですげぇんだって。嘘だろってくらいすっげぇの」

言いにくそうにしてたくせに、いつしか君は目をキラキラと輝かせながら話していた。

「鈴野さんはさ、カッコイイし、頭良いし、スポーツも万能だし、背も高いし、面白いし……」

そこで君は言葉を濁した。

「……面白いし？」

「頼りがいもあるし」

「お金持ちだし」

「爽やかだし……」

君はひとつ深呼吸をした。

「だけど、女性を愛せないんだ」

「……へぇー」

いわゆるあれか、ホモというやつか。

「最初に言っただろ。鈴野さんの家ってすっげぇって」

「言った、ね」

「鈴野さん一人っ子だしさ、御曹司、だし」

なんとなく、分かる。鈴野さんは嫁さん貰って継承者をポンポン生ませることを期待されているのだろう。

「女性を愛せないってのはさ、けっこうマズイらしい」

「だろうね」

「鈴野さんモテるのに、一度も女の子と付き合ったことがないからさ、鈴野さんの両親も気になっているらしい」

「だろうね」

「そこで、鈴野さんの両親がさ、鈴野さんにお見合い相手だとかをセッティングしようとしたんだけど」

「うん」

「鈴野さんは、それをとめたんだ。『俺、彼女いるから』っつって」

「居ないのに」

「そう、居ないのに」

「鈴野さんの両親は、じゃあ彼女さんを連れてきなさい、一緒に食事をしましょう、と」

「まぁ、そうなるわな」

「鈴野さんは思わず『よし、分かった！』と了承してしまったんだな」

鈴野さん、ちょっと馬鹿だね。と心の中で呟いてみる。

「了承してしまったからには鈴野さん、彼女を連れていかなければならない」

「だろうね」

「鈴野さん、人脈広いから、正直女の子をひとりふたり彼女に見立てるなんて容易いことなんだけどさ」

そこでなぜか君は私の目をみる。

「でも、鈴野さんが女性を愛せないってことは、周りの人には知られてないし、鈴野さん自身、知られたくないらしい」

だから。

「だからお前、鈴野さんの彼女役をやってくれないか？」

◇◆◇◆◇◆◇

別に周りの女性たちに鈴野さん自身が『女性を愛せない』ということを知られずに彼女役をやらせる方法は色々とあるだろう、と思ったが、せっかく君に頼まれたのだ。断るはずがない。

「こんにちは。君が『サッチャン』？」

目の前には、君から聞いていた通りのいかにも『鈴野さん』といった感じの人が立っていた。

「はじめまして、鈴野宏之です」

鈴野さんはスッと右手を前に出した。

握手だ。と思った。

思ったら何故か手が汗ばんできたので、服で手を拭いてから彼と握手をした。

温かくて、男の人特有のゴツゴツ感があって。だけどスラッとした綺麗で滑らかな指だった。

手を放したあと、変な汗をかいたけど、今度は拭かなかった。

「ごめんね、変なこと頼んで」

鈴野さんは本当に申し訳なさそうに言う。

「いえ、どうせ暇なので」

「本当にありがとう。感謝してる」

鈴野さんは爽やかな笑みを浮かべた。

その笑みは確かに素敵なんだけれど、君の笑みには遠く及ばなかった。

私は君のことが好きなんだなぁ。と改めて思った。

鈴野さんの御両親との食事は十九時からだ。

それまでざっと五時間はある。

どちらかというと人見知りの激しい私は、初対面の人と五時間近く二人きりなど無茶な所業なのだ。

しかし鈴野さんと一緒だと考えると、五時間は長い時間ではなく短い時間に思われた。

鈴野さんは、なんというか特別な力を持っているような気がする。

魅力的、というかなんというか。

とりあえず、すっげぇ人なんだ。

五時間の間に、そこら辺に転がっているような女は、ちょっと、ほんのちょびっとセレブになった。

鈴野さんが
「これ絶対サッチャンに似合うよ！」と言って、私にジャケットと鞄を買い与えてくれたのだ。

双方とも、値札を見るだけでも金をとられてしまうのではないか、と思われるくらいの値段である。

確実に、これは似合うから、ではなく、私の服装が御両親との食事には粗末過ぎたからだろう。

私としては一番高価そうな服装でやってきたのだけれど、『高価そう』と『本当に高価』の間には凄まじいほどの距離があることを知った。

◇◆◇◆◇◆◇

「は、はじめまして」

私の人生において、本来なら一度も入ることが許されないようなお店だった。

「はじめまして、可愛いらしい娘ね」

私の勝手な解釈だが、女の子に対する褒め言葉のうち『綺麗』は綺麗な人に送られ、『可愛い』はそれ以外の全てに送られるのだ。

ま、例外はあるだろうけど。

「ホントホント。宏之も見る目があるよ」

「でしょ？」

鈴野さんは完全に演技モードに入っている。

私も頑張らなくては！

いや、でも、演技以前にこの空気に呑まれてしまうよ。

それでも私はなんとか鈴野さんの彼女を努めた。

そしてその最中、何故かあることを思い付いてしまった。

何度も何度もその思い付きを消し去ろうとしたけれど、上手くいかなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

どうして君が鈴野さんの彼女役を探していたのか。

どうして鈴野さんの話を私にする時言いにくそうにしていたのか。

どうして鈴野さんの話をする時あんなに目を輝かせていたのか。
どうして鈴野さんが女性を愛せないということを君が知っていたのか。

思いがぐるぐる回る。
回った後、一点に収束してしまう。
それが嫌だから自らそれをかきまぜる。
また思いがぐるぐる回る。

◇◆◇◆◇◆◇

「うちの親、サッチャンのこと気に入ったみたい。もし良かったら、またお願いしても良いかな？」

「……は、はい」

まだ頭の中がぐるぐるしている。凄く、泣きそう。そして吐きそう。
でも、せっかく美味しい料理を食べたので、我慢する。

「本当に今日はありがとう」

鈴野さんは出会った時と同じように右手を差し出した。

私は彼のそのたたずまいをひどく憎らしく思った。
魅力的過ぎて、素敵過ぎて、勝ち目が無さすぎて。

私はまた手汗をかいていた。けれどそれを拭かずに差し出された右手ではなく、左手と握手を交した。

「こちらこそ、楽しかったです。それでは、また」

私は鈴野さんに手を振った。
鈴野さんも手を振った。
そして『ごめんね』と小さく呟いた。

電車の中で、私はその『ごめんね』を反芻する。
その言葉は、私の思いを全て汲み取っていた。
私の思い付きをはっきりと肯定していた。

私は泣いた。
悔しくて、泣いた。

でも、やっぱりこのままじゃ辛いから。
私は君に電話を掛けた。
意地でも『君が好きだ』と伝えてやろうと思ったんだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5107d/

さくら

2011年1月27日14時36分発行